

Edmund Husserl, *Philosophy of Arithmetic: Psychological and Logical Investigations with Supplementary Texts from 1887-1901*, Translated by Dallas Willard, (Kluwer Academic Publishers, 2003, lxiv+513p.)

伊藤 遼

本書は、フッサールの哲学上最初の著作“*Philosophie der Arithmetik*”（『算術の哲学』）とそれに関係する内容の諸論文とを収録した、D. ウィラードによる英訳書である。本稿では特に、本書のうちでもその中心である『算術の哲学』の部分を紹介しよう。

『算術の哲学』は、他のフッサールの著作に比べると、これまであまり注目されることがなく、また注目されたとしても、フッサール現象学の萌芽が見られる著作として扱われるにとどまり、その内容に独自の意義を見出されることはほとんどなかった。このことに関して、その訳書は、私の知り得る限り、この英訳版を除けば、戦前に刊行された邦訳版（寺田弥吉訳, 1933）と仏訳版（Presses Universitaires de France, 1992）が刊行されているのみである。本書の訳者であるウィラードは、主として、論理学、フッサール現象学、キリスト教についての宗教学を専門とする南カリフォルニア大学哲学科の教授である。彼は、フッサール全集（“*Husserliana*”）の英訳版の刊行にあた

って、この『算術の哲学』だけでなく、その初期の論理や数学に関係した諸論文の翻訳（“*Early Writings in the Philosophy of Logic and Mathematics*”, 1994）も手がけている。

さて、まずは、原典である『算術の哲学』について説明しよう。この『算術の哲学』は、1887年にフッサールがハレ大学に提出した教授資格取得論文に、さらに内容が加えられて、1891年に刊行されたものである。19世紀には、コーシー、ボルツァーノ、ワイエルシュトラスらによって、数学の算術化（*Arithmetisierung*）が進められた。数学、とりわけ、微分積分学の厳密な基礎付けを目指す算術化の運動のもと、最も単純な数である自然数が問題となった。当初、数学を専攻していたフッサールが、このことを受けて、自然数概念の「心理学的起源」と自然数を扱う算術の構造とを解明することにより、数学の基礎付けを試みた著作が、『算術の哲学』に他ならない。しかしながら、この『算術の哲学』は第1巻として刊行されたものの、続く第2巻が刊行されることはなかった。なぜなら、自然数の「心理学的起源」を探究するという『算術の哲学』における取り組みは、数学および論理学が心理学によって基礎付けられると見なす心理学主義（心理主義）的なものであったが、その心理学主義こそ、やがてフッサール自身により『論理学研究』第1巻（1900）において、論駁されるところのものだったからである。

次に、『算術の哲学』におけるフッサール

の主張のうちで重要と思われるものを説明しよう。『算術の哲学』は2部から構成される。とりわけその第1部では、第2部の倍近くの記述がなされており、『算術の哲学』を特徴付ける主張が展開されていると言える。「多と一と基数の本来的概念」と題されたその第1部では、自然数概念の「心理学的起源」が探究される。フッサールの言うところの「本来的概念 (authentic concept/der eigentliche Begriff)」とは、その概念の対象がわれわれの精神へと直接現前することによって獲得される概念のことである。フッサールによれば、数の本来的概念は、われわれにとって、多 (multiplicity/ Vielheit) の概念として表象される。また、この多という概念は、語義に多少の違いはあるにせよ、「総体 (totality/ Inbegriff)」 「集合 (group/ Menge)」などとも言い表される。

それでは、いかにして、多の本来的概念はわれわれに与えられるのか。われわれが、その目前にある諸々の対象を「数」として意識するためには、単にそれらを個々に意識するだけでなく、加えて、諸々の対象を1つずつ結びつけるという「心的な」行為が必要となる。この行為によって、1つの総体 (すなわち多) として統一された諸々の対象が、われわれの意識に表象されるのである。そして、この諸々の対象の間の統一を「集合的結合 (collective combination/ die collective Verbindung)」とフッサールは呼び、それは「心的」ないし「心理学的」な関係であるとされた。

しかし、多の概念は、このような集合的結合によってのみ与えられるのではない。諸々の対象が、単に「数」として意識されるためには、それら諸対象の内容そのものは捨象されなければならない。多の概念において、諸々の対象はそれぞれ、単に「あるもの (something/ Etwas)」として意識されるのである。

このように、多の本来的概念は「あるもの」と「集合的結合」という2つの概念から成る。つまり、多とは、諸々の「あるもの」および「と (and/ und)」から成る、「あるもの」「と」「あるもの」「と」…「と」「あるもの」なのである。そして、このような多の構造を前提とした上でのみ、特定の基数の概念が成り立つのである。以上のような、数の本来的概念が「心的」行為によって与えられるとする主張こそ、『算術の哲学』におけるフッサールの立場を特徴づけるものに他ならない。

ところで、フッサールによる数の「心理学的起源」の探求は、以上で終わりではない。フッサールは、さらに大・小・同という関係を取り上げる。多における、これら大・小・同という基本的な関係は、数の理解において不可欠なものである。というのも、自然数とは、2, 3, 4…と続く系列 (フッサールによれば、0 と 1 とは、多ではなく、それゆえ、元来、数とは見なされない) を為すものであり、多の概念をもとに自然数の系列が構成されるためには、多と多との間の関係、すなわち、大・小・同という関

係が明らかとなっていなければならないからである。そこで、フッサールは、これらの関係についてもその「心理学的起源」の探求を行なうこととなる。その探求によれば、われわれが、諸々の多と多との間にこれらの関係を見出すとき、複数の多が1つの行為において同時に表象されているという。例えば、(A, B, C) という総体が、(A, B, C, D, E) という総体へと拡張され、後者が前者よりも (D, E) だけ大きいと判断されるとき、われわれには (A, B, C)、(A, B, C, D, E)、(A, B, C; D, E) という3つの総体が、1つの行為において同時に表象されているのである。このような考察によって、高次の心理的行為、すなわち、心理的行為に向けられた心理的行為の存在が明らかとなる。大・小・同という関係は、心理的行為において表象された諸々の総体をさらに1つにまとめあげる、という高次の心理的行為に基づくのである。

『算術の哲学』の第2部は、「記号的基数概念と、基礎的算術の論理的源泉」と題されている。われわれに本来的に与えられ得る数概念は、算術においては、ほんの一隅でしかない。というのも、われわれにとって本来的に表象され得る数は、比較的小さな数に限られるからである。しかし、それならば、本来的に表象され得ないような、無限大をも含めた大きな数についての概念はいかにして表象されるのか。フッサールによれば、これらの数は、例えば十進法のような、諸記号とその諸体系とによって「記

号的概念 (symbolic concept/ der symbolische Begriff)」ないし「非本来的概念 (inauthentic concept/ der uneigentliche Begriff)」として表象される。

記号的概念と本来的な概念とは、各々がとる対象が同一である限りにおいて、論理的に同値であるとされる。それゆえ、記号的概念は本来的概念の代わりとして働くことができるのである。このようにして、数の記号的概念とその諸体系は、その対象たる自然数の系列との平行関係を形成する。それゆえに、われわれは、数そのものを顧慮することなく、数の記号的表象、すなわち、数字やその他の諸記号を用いるだけで算術を実行することが可能なのである。また、フッサールは、数式や方程式を、数の記号的表象の1つとして見なす。それら数式や方程式は、体系的に数概念を表象するところの数字とは違って、記号的表象のうちの、非体系的なものなのである。例えばわれわれは、十進法において「66」という数字によって表象された数が65よりも大きいということは、即座に判断できるが、「 $18+48$ 」という数式で表象された数については、そうはいかないだろう。フッサールによれば、数式や方程式を数字へと単純化ないし還元するための諸手続きおよび諸理論を提供することが算術の課題である。

以上が、『算術の哲学』におけるフッサールの主張のうち重要なものである。次に、本書が『算術の哲学』の訳書であるということ踏まえて、訳者であるウィラードの

『算術の哲学』に対する考え方について触れておきたい。本書には、彼による、50 ページ以上にわたる序論が収録されている。それは、主として『算術の哲学』の内容を概略するものであるが、われわれは、そこから彼の主張を汲み取ることができる。そのうち、特にここで触れておきたいものが、これまでのフッサール現象学の研究における一般的な考え方とは大きく隔たっているであろう次の2つの主張である。

1つは、『算術の哲学』に見られるフッサールの主張と心理学主義とについてである。これまで、『算術の哲学』の主張は、数学を心理学によって基礎付けようとする心理学主義的なものであると見なされてきた。しかし、ウィラードは、このような見解に異を唱える。フッサールは、その初期の諸論文において既に、数についての非心理学主義的な分析を意図し、また実行していた、とウィラードは主張する。彼によれば、フッサールは、数とその諸法則とが、通常の意味での「心的」な関係において存在するとは決して考えておらず、フッサールにおける「心的」という語は、「範疇的」ないし「形式的」にあたる意味で用いられている、とされるのである。

もう1つは、われわれが『算術の哲学』を扱う態度に関する主張である。ウィラードは、フッサール現象学についての研究という観点から、『算術の哲学』を、現象学の萌芽が見出されるものとして扱うという態度を批判する。実際、『算術の哲学』にはそ

のような萌芽を見出すことができるし、また、その目的でこれまで『算術の哲学』は扱われることが多かった。しかし、『算術の哲学』においてわれわれは、フッサールについてではなく、数と算術とについて学ぶべきであり、また、数と算術とについてより良い理解を得るために、一時的に、フッサールを学ぶべきである、とウィラードは言う。『算術の哲学』において、いわば間接的に現象学を研究するのではなく、そこでまさに主題として扱われるところの数と算術、それ自体を研究するという態度こそ、「事象そのものへ」という現象学の精神に当てはまるものだとは彼は考えるのである。

最後に、本書の訳について触れておこう。本書の訳は、総じて、原典に忠実であり、かつ、比較的読みやすく仕上がっていると評価できよう。文法的な観点からすれば、本文にはしばしば、語順などにいくらか不自然な箇所が見られるが、それも、訳者が原典の表現に出来る限り忠実であろうとしたためである、と私には思われる。

以上で、本書の紹介は終わりである。今後『算術の哲学』が、これまでと同じように扱われ続けるのか、それとも、ウィラードが期待するように、それ独自の意義を見出されるのか、それは私には分からない。しかしながら、少なくとも、本書によって『算術の哲学』の世界を知るための、そしてまた、それに独自の意義を見出すための新たな方法がわれわれに与えられた、ということ間違いはない。